

人と人をつなぐ学習環境のデザイン

—授業におけるネットワークの構築—

森下雅子（早稲田大学日本語教育研究センター）

ma-ko@msh.biglobe.ne.jp

【要旨】

本稿では、筆者が早稲田大学日本語教育研究センターで行っている、「日本の良さを知る～伝統文化を学ぼう」という授業実践について取り上げる。対象は中級から上級の留学生で、3つのクラスがある。この授業は、実際に自分の身体で様々な日本の伝統文化を体験したり、その道のプロの方々と触れ合ったり、ボランティアたちとディスカッションすることにより、日本語能力の向上だけでなく、人生に必要な多くのことを吸収してもらいたいという思いから始まった。そして、留学生だけでなく、ゲストの先生、ボランティアなど授業に参加するすべての人にメリットがあるネットワークを構築することにより、みんなが生き生きと活動できる学習環境のデザインを目指している。

1. 授業の概要

「伝統文化を学ぼう」の授業は、大きく「知識編」と「実践編」に分かれている。双方とも日本の、そして自国の伝統文化を改めて知ってもらうために、①日本の音楽、②日本の演芸、③日本の衣服・美、④日本の工芸、⑤日本の食、⑥日本の武道という、主に6つのテーマを設定し、幅広い分野を学べるようにしている。

まず、「知識編」の授業では、学生は最初の授業で上記6つのグループのいずれかに入り、その中でそれぞれ何を発表するかという棲み分けをする。プレゼンの時間は一人6分。それが終わった後にグループでクラス全員を巻き込んだ10分のワークショップを行う。たとえば武道グループなら剣道、合気道、柔道などの個人の発表を行い、ワークショップではクラス全員で空手の型をやってみるなどである。さらにその他にも、ゲストの先生による講義&実践（4回）と演劇博物館見学がスケジュールに組み込まれている。ゲストの先生方は每期ごとに変わる。2015年春学期は小鼓、香道、和太鼓、白拍子・声明で、秋学期は侍道、古典生花、ちぎり絵、江戸っ子の生き方と言葉である。

次に、「実践編」であるが、「知識編」とは異なり、学生によるプレゼンはなく、伝統文化の体験が主となる。ゲストの先生による講義&実践が7回。これも每期内容が変わり、2015年春学期は長刀、稲荷寿司、アコーディオン民謡、落語、古代文字、家紋、風呂敷で、秋学期は空手、手まり寿司、蒔絵、粹曲、民踊、和太鼓、能である。その他に歌舞伎・文楽の鑑賞教室、相撲観戦、そして学んだことを振り返りながら日本語ボランティアとともにやるディスカッション&発表で授業が構成されている。

2. 授業の目的

本授業を始めた元々の動機は、日本でしかできない体験をすることにより、留学生に良い思い出を作ってもらいたいというものである。日本語だけなら世界の多くの国で学べるが、単に映像や活字だけ

ではなく、実際に自分の身体で日本の文化を体験できる機会は少ないであろう。さらに日本語ボランティアの募集に力を入れ、授業には常時多くの方々に参加してもらっている。それも自国では日本人と触れ合う機会が少ないであろうから、多くの学びのリソースを準備してあげたいと考えたためである。

その他の目的として、以下のことが挙げられる。

①日本の伝統文化を学ぶことは、自国の文化を、そして自らを見つめ直すことでもある。本授業を契機に自分や級友の国の伝統文化にも目を向け、異文化の相互理解を深めてもらう。

②自分が興味を持っていることを調べて発表したり、ボランティアや他の学生とディスカッションしたり、内省したレポートを書いたりすることにより、知識を広げ、実践的な日本語の力をつけてもらう。

③大学内や同世代の人達だけではなく、誇りを持ってその道一筋に精進している様々な分野のプロであるゲストの先生方と触れ合うことにより、人生に必要な多くのことを吸収してもらう。

3. 評価の方法

本授業は、出席・参加度（授業やディスカッションにどれだけ真剣に取り組んでいるか）、体験ごとのレポート（知識編4枚、実践編7枚。内容の質と期限内での提出）によって評価している。知識編はその他に発表と最終レポートがある。

4. 人と人をつなぐ学習環境のデザイン

筆者が目指しているのは、授業に参加している全員にメリットをもたらす、ウィンウィンのネットワークを構築することである。学生にメリットがあるのはもちろん、ゲストの先生方にとっても、たとえば若手の芸人などには早稲田大学で教えたということがある種の履歴になるし、すでに第一線で活躍している方にとっては、留学生を通して世界に自分の素晴らしい文化を伝えられるという利点がある。さらに地域の人材センターや社会人のボランティアの方々には、若い学生と触れ合い共に学ぶ楽しさや、自分の背景を生かして役に立てるといった喜びがあり、学生ボランティアには留学生と同様に学んでもらえる。このように、授業を一つの共同体と捉え、留学生をはじめとするその参加者を様々なネットワークにつなげてあげること、そして創発的な学びが起きるための仕掛けやリソースを用意し、それぞれが生き生きと活動できる居場所を作ってあげることが、教師の役割ではないかと考える。

多くのゲストの先生やボランティアのスカウト・調整、授業までの御膳立て、準備、後始末、材料やチケットの手配・集金等の一連の仕事は、学生の人数が多いこともあって大変な労力である。それは学生には見えないかもしれない。だが、教師がファシリテーターに徹するからこそ、留学生が主体となる授業が実現できるのではないだろうか。そしてこれらのネットワークは、筆者にとっても大切な財産であることは間違いない。